



# 知行院便り

発行/宗教法人知行院 東京都世田谷区喜多見 5-19-2 TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



**ごあいさつ**  
**知行院住職 坂本観泰**

四月一日、観晃大僧正より寺務一切を引き継ぎ、手探りながらご本尊様のお給仕をさせていただき早、三ヶ月。先日は、知行院の年間行事の中で最も重要で大きな法要、「大施餓鬼会」を皆様のお力添えによって円成することができました。

これまで二十五年間、副住職として下準備に専念してきましたが、今回初めてお導師を含め、一切合切自分一人で勤めさせて頂き、改めて住職の任の大きさを痛感し、気持ち新たにしたいところです。

先代、観晃大僧正は昭和六十二年住職就任以来、寺観の一新に心血を注がれ、都内でも指折りの寺院に数えられるほど、立派な伽藍にされました。その後を継ぐ者としたしましては、その伽藍を更に有効に、且荘厳に活用できるように、ソフト面の充実にも努めようと考えております。

手始めとして、平成十一年お盆から十五年暮れまで、十号にわたって発行し、諸般の事情で約十年お休みしておりました「知行院便り」を再開し、もっと頻繁にお寺からの情報を発信していこうと思っております。

前回は、私もまだまだ若く、少し気負い過ぎてしまい、寺務にいささか支障をきたし、お休みを余儀なくされましたが、今回は多方面からお手伝いやアドバイスをお願いし、新しいスタイルでお寺からの情報発信をしていきたいと思っております。

この「知行院便り」に限らず、更に開かれたお寺をめざして行きたいと思っておりますので、お気づきの点、ご意見等ございましたら、遠慮なくお寄せください。

## 先代住職が滋賀院門跡にて名誉住職を拝命



先代観晃大僧正は、六月六日、滋賀院門跡（滋賀県大津市坂本）五日講之間にて執行された平成二十六年第一期住職就任辞令親授式に出席し、知行院名誉住職の辞令を拝受されました。親授式には天台宗、延暦寺両内局役員が参列。出席者は天台宗僧侶の正装である、素絹・五條・切袴に身を包み、天台座主半田孝淳殿下のご名代であられる次席探題、真藏院森川宏映大僧正様より一人一人住職辞令を授与されました。出席者は滋賀院で会食後、宗祖伝教大師の御廟所・浄土院を参拝、帰路につきました。

## こんにちは、住職夫人の有佳理です



これまで、新任職の意向で子育てに専念させて頂いておりなかなかご紹介できずにおりました、新任職夫人をご紹介します。新任職とは平成五年一月結婚（大恋愛の末）、二女（二十歳、双子）、一男（十七歳）三人のお母さん。三人姉妹の末娘で一見頼りなく見えますが、芯はしっかりとした近江女子です。毎朝四時半に起床、朝練に出かける息子の弁当作りから一日をスタート、日中は住職のサポート、就寝前に大量の洗濯と毎日頑張っております。気さくな性格です。「ゆかりさん」と気軽に声を掛けください。

## 住職のおはなし お経の功德

知行院では、法事の際、参列の皆様と一緒にお経を読むことがあります。これは、法事中、ただ黙って座っているのではなく、皆さんもお経の功德を積んでいただきたいの思いから始めたものです。その「お経の功德」についてちよつとお話したいと思います。

そもそもお経とは、お釈迦様が入滅後にお弟子たちが集まり、それぞれが記憶する教えや戒律を整理して文章にまとめたものです。お釈迦様が四十年にわたって説かれた教えは無量広大で数えきれないと言われています。

中国の高僧、天台大師智顛（天台宗の開祖）は数多の経文の中から「法華経」を、諸経の王として位置付けます。そして日本天台宗を開かれた伝教大師最澄はこの「法華経」を根本経典とし、広く国中に流布することによって衆生を救おうと修行に励まれました。

「法華経」は、全部で二十八品（章のようなもの）あります。前半の十四品でお釈迦様の説いた教えの真実は何を示し、後半ではお釈迦様の生命

は永遠に不滅であることを示しています。今、知行院で読んで頂いている「寿量品」は十六番目ですから後半にあたります。その第十番目に「法師品」がありその中にこそ、「お経の功德」が説かれています。

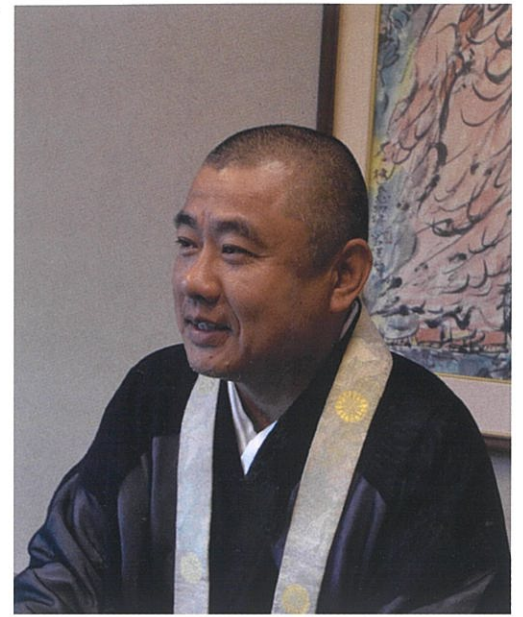
「法師品」には五種類の「法華経」の修行を「五種法師」として説かれています。それは經典を受持、読、誦、解説、書写の五つで、①受持とは仏の教えを受け持つこと、②読とは経文を見ながら読むこと、③誦とは経文を暗誦すること、④解説とは法門を解釈して説くこと、⑤書写とは経文を写すこと、を言います。この五種の行を積むことで、自らご利益を得ることができると同時に、他をも利益すると説かれています。

法事で皆さんにお経を読んでいただくのは、「受持」と「読」にあたり、それによってご自身に功德を積むことができ、さらにはそれを故人に手向けることができるのです。普段お経を読む事が少ない皆さんに声を出してお読みいただくのは、大変かもしれません。ご自分とご先祖様にご利益がありますので、しっかりとお読みいただければと思っております。



新住職インタビュー

お坊さん修行時代と祖父の思い出



本年四月、知行院の住職が交代し、坂本観泰第二十八世住職が生まれました。新住職はこれまで二十五年間、副住職として知行院を支えてきましたが、今後は檀信徒の方々の協力のもと、よりいっそうの寺門発展にご尽力されると思います。

そこで今回、寺報復活と新住職就任を機に、新住職のインタビュー記事を何回かに分けて掲載したいと思います。檀信徒の皆さんの中には、副住職時代に親しくお付き合いされてきた方もいると思いますが、どんな人なのか詳しくは知らないという方もいると思います。ぜひこれを機会に、新住職の人となりを知っていただき、お寺に親しんでいただきたいと思います。

(聞き手 編集担当 薄井秀夫)

**聞き手** ご住職就任おめでとうございます。新しく住職になられて、これから色々大変だと思います。そこでですが、ご住職のこれまでのご活動や、今後の知行院についてのお考えをお聞きしたいと思います。まず、ご住職はこのお寺に生まれて、いつかはお坊さんになるのだというのを、いつ頃から自覚をするようになったのですか？

**住職** 七歳、八歳くらいの頃からんですけど、お寺に来ていたおばさんたち、ご詠歌の練習に来ていたような方々から「ふくふくじゅうしょく(副々住職)」とおだてられて、その気になっていた記憶がありますね。それで、何も疑いも持たなかったのでしょうかね、十一か十二で、出家得度しました。祖父の弟子になってね。

中学に入ってから、お盆の時期なんかには、父や叔父につられて、檀家さんのお宅に柵経に行くようになりました。その頃は、お坊さんのかつこをするのに抵抗があつて、友達とかに見られるのがちよつと嫌だつたんです。それで柵経は、学生服を着て行つた記憶があります。

**聞き手** お祖父さんが師匠だつたんですね。

**住職** 祖父は明治の人で、厳しい人ですね。よく手が出ましたよ。ケガして救急車に乗つたこともあります。でも何だかんだ言つて、いつも祖父

父の近くにいましたね。今でも、人としてのあり方は、祖父に教わつたと思つています。学校の先生をやつていたんで、生徒さんが、よく「先生」と言つて訪ねてきました。お寺で野球を始めたのも祖父です。野球を通して、子ども達の情操教育をしていきたいと考えていたようです。当時は、ここの鐘撞き堂をバックネットにして、ピッチング練習をやつていましたよ。

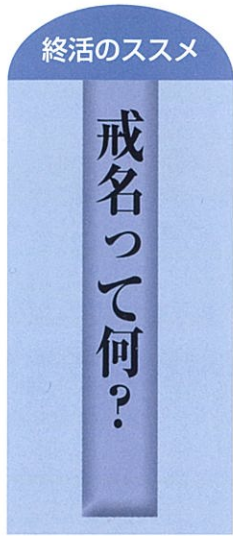
**聞き手** 子ども好きな人だつたんですね。

**住職** 私は大学を卒業した後、本山の比叡山延暦寺で三年間修行をすることになりました。実は比叡山に行く前の晩に飲み過ぎてしまつたんですね。それで旅立つ朝に寝坊して、祖父にはあいさつせずに行つてしまつたんです。比叡山にあがつたら、もう三年間は下山することはできないのですが、祖父はその間に亡くなつてしまつたんです。それが心残りですね。

**聞き手** それは、つらいですね。

**住職** 祖父は、人のためだつたら、寝ないでもやるといつたところがあつたですね。何をやるにしろ、絶対に手を抜かなかつたです。特に檀家さんに対しては、「手紙ひとつだつて、おろそかにするんじゃない」と何回も言われました。そうした祖父の言葉は、今でもずつと心に残つています。

住職になつて、あらためて思うのは、祖父がこのお寺をどんなお寺にしようとしていたのかという事です。これからはそれを常に模索しながら、住職を務めていきたいと思つていますね。(続く)



宗教ジャーナリスト 薄井秀夫

「終活」って言葉をご存じですか？

「終活」とは、人生を終えるための準備活動のことです。具体的には、元氣なうちから自分のお葬式や末期医療、あるいは財産の処分などについて考えておくことを言います。

今回、知行院さんの寺報が復活するというところで、住職から終活について連載するよう言われましたので、特にお葬式や法事を中心に色々な話題に触れていきたいと思います。

初回のテーマは、戒名についてです。

戒名とは、仏教徒としての名前、仏教徒になつた時にいただく名前です。人が亡くなつた時にお寺からいただく名前と思つている方が多いと思つますが、本当は生きているうちにいただくのが正式です。

お寺の檀家さんは仏教徒ですから、生前にいただけでもいいのですが、実際にはなかなかそんな機会ありません。だから亡くなつた方があの世に行つた時に仏さまの弟子であることを示せるよう、お葬式の時に戒名をいただいているのです。

私は、仕事柄、よく知人から「戒名料はいくらくらい包んだらいいの？」という相談を受

けます。

これは難しい質問です。正解は「戒名のお布施は、仏さまへの気持ちだから、気持ち分を包めばいいんですよ」です。しかしこの答えで納得してくれる人はいません。やっぱり皆さん、具体的な金額が知りたいということですね。

そんな時は、「こういう機会に親類とかに聞いてみたらどうですか？」ということをお伝えします。もともと、お布施とか葬儀のしきたりなどは、親類や地域の人から教わるというのが一般的でした。今は、親類などと疎遠になつている方も多いためですが、これを機会に相談をして、縁を深めていただければいいかがでしょうか？

お布施というかたちで、仏さまへの気持ちを表すことは、確かに難しいことです。金額が決まつていないのは、いろんな状況の人がいるので、その状況に応じて包めばいいようにするための智恵でもありました。昔は、親族や地域の人を通して、こうした智恵が受け継がれていたのです。

また戒名に、いい戒名、わるい戒名というのはありません。たくさんお金を包んだから、いい戒名をいただけるというわけではなく、仏さまの前ではみな平等で、すべていい戒名なのです。戒名をいただくという事は、仏さまと縁をいただくということです。遺された家族も、これを機会に仏さまと縁を深めていくことが何よりも大切でしょう。

復興のアクリルたわし

7月の施餓鬼で、皆さんにお配りした「アクリルたわし」ですが、これは東日本大震災で被災されて、仮設住宅などに暮らしている方たちがつくつたものです。

マンボウやイカ、蛙、ホタテなど海の生き物を形どつた手作りのたわしに、興味を持たれた方も少なくなつたと思つます。「あんでねつ」という団体が中心になつて行つている復興プロジェクトで、売上金は全額、住民の会の運営費にあて、たわしづくりを通じた被災者同士のコミュニティづくりに役立てています。また知行院では、この「アクリルたわし」を通して今後も被災地支援をしたいと考えており、皆さんもご協力いただければ幸いです。お寺に置いてありますので、ご希望の方は、ご自由にお持ちください。

